

家族で訪れた三陸海岸の光景が浮かび上がった。松島湾のフェリー乗り場に展示されていた写真は津波のすさまじさを教えてくれた。ありえない場所に乗り上げた船、ひっくり返った車。どこも泥だらけで悲惨な状況だった。校舎の上にも水が来たという小学校に着いた時は、海からも川からも遠く離れていることに驚いた。ただ、石に刻まれた犠牲になつた人達の名前を見ながら、私は何を感じていたのだろうか。慰霊の気持ちはあつたのだ。ろうか。被災地の写真の前でも、慰霊碑に手を合わせせた時にも、私の心に涙が出るような悲しみが湧くことはなかった。そんな私にアークとリヌナたちが、失われた命の痛みや悲しみを伝えてくれる。私は、なぜあの時、もつと真剣に津波の傷跡を目に焼き付けて来たのか。つたのだからうと悔やまれる。特にこの本の中で心に残つたのは被災地で働くボラニテア人たちの考え方だ。想像うミオが聞こえる人や聞こうとする人がいる。

ける	う	こ	リ	ク		そ	め	な	も	知	理		心	の	木		い	い	中
る	。	の	ス	の	ア	の	ら	。	触	ら	解	ど	の	の	に	で	る	。	そ
ア	杉	本	ナ	ミ	ー	言	れ	た	れ	さ	す	き	領	苦	巻	語	と	ん	
ク	の	を	ナ	ヨ	ク	葉	て	人	な	れ	る	っ	域	し	か	る	い	な	
に	木	読	ー	ク	は	が	い	た	が	た	こ	に	に	み	れ	。	う	こ	
リ	の	み	た	ク	軽	重	。	ち	ら	。	と	我	は	は	、	、	人	と	
ス	上	終	ろ	や	快	く	鎮	へ	、	広	は	は	絶	胸	何	が	こ	を	
ナ	で	ゆる	が	笑	な	響	魂	の	そ	島	、	人	対	を	か	い	と	考	
ー	自	る	も	い	口	い	、	深	れ	、	長	リ	に	か	聞	た	こ	え	
た	分	こ	が	声	調	て	私	い	ぞ	崎	こ	絶	ら	こ	え	と	だ	る	
ち	の	と	が	が	で	き	の	深	れ	、	む	対	に	む	た	。	。	の	
が	家	が	で	明	ん	。	心	い	の	東	べ	に	か	と	し	。	は		
答	族	で	き	る	ど	も	に	鎮	意	京	き	ら	ら	し	て	。	死		
え	を	な	な	く	ん	だ	も	魂	見	大	で	な	な	も	、	。	者		
る	心	か	か	な	ん	ん	だ	の	の	空	は	い	な	、	。	を			
。	配	っ	ら	た	語	だ	ん	気	中	襲	い	。	い	。	侮				
同	し	た	、	、	る	ん	だ	持	に	の	と	遺	。	。	辱				
じ	呼	と	た	ら	。	だ	ん	ち	、	思	い	族	。	。	し				
痛	び	思	私	ら	ア	ん	だ	が	七	い	を	の	人	。	て				
	か	は	は	、	ー	と	と	込	く				人						

みを持つ、た者同士が想像し合うことで、ア
クは奥さんの無事を知ることができ、そし
て、自分がどんなに愛されてたのを感じる
と、リスナーたちの励ましと拍手喝采に送ら
れて風のように旅立っていった。
震災の悲惨な姿を背景にしながらも、ア
クの旅立ちに心がじんわり温かくなつたのは
なぜだろう。自分のことしか考えられない私
に小さな明かりが灯つた気がする。
千年に一度の大災害に遭遇し、
がれきに潰

され、波に流され、苦しめられて亡くなつた
人たちが、お互いに励ましあい声援を送る。
そして、心の救いとなる助言を発する想像う
ミオが読者に伝えたこと、私にはしかりと
受け止めた。
今の私は自分の生活の中に幸せを感じるこ
ともなく不満ばかり抱いている。私のために
してくれること、全てのこと、
が当たり前だと思
ってしまふ。自分の気持ち
が上手く伝えられ
ず言葉が見つか
らないで困って
いると反抗的

な態度に取られてしまい、ひどく怒られる。
大人から強制されることに全く関心を示す事
ができてなくて、家族の存在すらうっとうしい
こともある。そんな自分を想像うジオは反省
させてくれる。そして、教えてくれた。毎日
の生活を大切にしなさい。人の痛みを知らない
さいと。今の自分をすぐに変えることはでき
なくても、変えようと努力ができるようにな
らなくてはと思う。

この本を読むことで、なぜ私の家族は東北
を訪れたのかを理解できた。その上、その時
は何も感じなかつたのに、今は自分にもな
かできないことはないか考えるようになった。
今の私にできることは、誰の役にも立たない
けれど、この災害を決して忘れないことだと
思う。あの地で映した写真を見ながら、この
記憶をいつまでも留めておくことだと思
う。これからも私たちの国は災害に繰り返し襲
れるだろう。その時に涙を流している人達に、
私にできることは何なのかを、本当に心を寄

せて考えることのできる、人の痛みをわかる人になりたい。